# 「児童の世紀」を振り返る

## ――その六――

本田　和子

### パラダイムの転換と子ども学

驀進する工業生産が公害という新たな社会問題を発生させ、過剰なまでの上昇志向が徒に競争を激化させて人心を蝕む。一九六〇年代後半は、豊かな社会を追い求め続けた結果が、様々な問題を露呈し始めた時期でもあった。「進歩は、果たして絶対的な善であり得るのか」という素朴な疑問が呈され、より速くより便利にと、ひたすらにゴールを目指して直線的に流れ続けた時間を円環状に回帰する時間と対比させつつ、改めて「進歩」の意味が問い直されもした。

こうした状況下で、知の世界にも新たな波動が起こり始めていた。例えば、ニュートン力学の限界が指摘され、あるいは、進化論の誤謬が云々される。万有引

力の絶対性やダーウィン流進化論の基盤の上に成立していた今世紀の知性が、根底から揺すぶられ始めたのであった。それらを総括して、二十世紀的知の枠組みが解体し新たな枠組みが要請される時期、すなわち「パラダイムの転換期」の到来と把握することも可能だろうか。当然のことながら、その動きは自然科学の分野に止まらず文科系の諸学にも波及した。というより、自然科学系諸学におけるそれが、実際的・個別的研究における不可避の理論更新であったのに比し、文科系諸学のそれは「転換」という動きそのものに対するより鋭敏な反応と言うべきかも知れず、そのゆえに既存の知的枠組みへの挑戦とそこからの脱皮が、新しい課題として浮上してきたのであった。

ところで、こうした転換期、極言すれば知的世界の激動期とも言うべきこの時期に、「子ども学」が選択したのは、どのような方略だったのだろうか。私どもは、二十世紀が、「児童の世紀」という華やかなキャッチフレーズの下に開幕したことを知っている。しかも、それが、進化論に立脚した人間観・子ども観を基盤とし、「進化＝進歩＝発達＝善」であることを疑わない向日的な心性に支えられたものであったことにも気付かされている。つまるところ、この世紀が「子ども」に注いだのは、「進歩発達する可能態としての子ども」へのまなざしであり、彼らを巡る処遇は、その可能性を開花させ、みずからの期待を実現化するためのもろもろの対策であったと言えよう。

とすれば、この基盤の揺らぎに対して、「子ども観」も「子ども関係の諸種の営み」も、大幅な更改を迫られざるを得ないだろう。しかし、とは言うものの、子ども関係諸学におけるパラダイムの転換は、事々しくは話題とされず、かつ、必ずしも時代的意志をストレートに表現する形では動いてこなかったかに見える。なぜなら、子ども関係者たちや教育者たちの間からは、「発達は必ずしも善ではない」という反省や、「発達しないものの価値を見いだそう」という提言は、皆無とは言わぬまでも、さほどの注目を浴びる

こともなかったように見えるのだから。例えば、障害を負う子どもたちの周辺から起こったこれらの呟きは、果たしてパラダイムの転換期を告げるカルチュアルショックとして受け止められたのか、否か。

しかし、こうした基本的な問いとは無縁なままに、斯界は、新動向の余波に洗われ、随所で相応の変化を示し続けてもいる。そこで、この不鮮明な関係と、この間の経緯を、今回の課題として振り返っておきたい。

## 「構造論議」と底流としての「構造主義」

教育界に「構造」を問う声がしきりとなった時代がある。一九六〇年の終わりごろだったろうか。義務教育の構造はどうあるべきか、あるいは、それぞれの学年の教育内容はいかなる構造から組み立てられるべきか、など、構造論議が斯界を賑わしたのであった。私どもの周辺でもその声はしきりであって、保育学会のシンポジウムのテーマにも取り上げられ、保育内容の構造を「遊び」と「課題活動」の二本立てにすべきか、もしくは「仕事あるいは作業」を加えて、三本の柱から考えるべきかなど、論議が戦わされたこともあった。

これらの場合、保育の「構造」として取り出された「遊び」あるいは「課題活動」に関して言えば、それらは「実践の世界」そのものとしてではなく、「観念の世界」の考えるに適した記号として抽出されていたのだが、これら構造論議に関するメタ構造論、すなわち、この理論のよって立つ基盤そのものを問う試みを欠いたまま、ただ、実践を支える主要素の抽出とその組み合わせが試みられたのが、当時の現実であったと言い得る。

言うまでもなく、「保育という現象」は、時々刻々推移し変転する成員個々あるいは彼ら相互の活動と、

瞬間瞬間に彼ら行為者によって付与される意味と、その意味によって生起される新たな活動の継時的展開として捉えられよう。しかし、それらが観念の土俵に乗せられ、思考する者たちによってその意味が確認されようとするとき、そこでは何らかの記号化が不可欠となる。そして、この当時にあっては、記号化された現象の内的法則が求められることになり、結果として、その時々の実践である保育現象を、「遊び」と「課題活動」の二項、あるいは他の何かを加えた三項によって、体系化し法則化しようという試みが生まれたのであった。

ところで、率先して構造化に意欲を燃やした教育関係者たちの多くが、集団主義者であったり社会主義圏の教育にシンパシィを抱く人々で、多少なりとも「社会派的」傾向の持ち主であったことは、改めて振り返る視界に興味深く映じてくる。マルクスが、人の生きる現実を実践の世界と観念の世界との二相に分かち、前者を下部構造、後者を上部構造と呼んだことはよく知られている。そもそも人間社会の集合表象内に見いだされるある規則的な体系性に着目し、それを「構造」と呼ぶことを試みたのはマルクスであったと言われている。とすれば、マルクスは、構造論の本家本元と言うことも可能だろうか。となれば、社会派色の濃い理論家たちが、教育界に「構造」概念を導入したとしても何ら不思議はない。

しかし、これらの人々の「構造」に寄せられた関心は、単に、彼らのマルキシズムや社会主義体制への関心を示すものだけとは言い難い。むしろ、彼らの「構造」への関心は、世界の「構造的把握」を促進して止まない大きな流れが、時代の心性の底流としてうねり流れ始めていて、その流れに促された結果と言えないだろうか。なぜなら、進化＝進歩＝善という図式が解体されたとき、世界は、「進歩」という唯一の価値を目指して直進する運動体であることを止めた。と同時

に、「進歩」という目標に向かって努力する意志的・理性的主体とされた人間は歴史のなかに溶解し、輻湊する様々な要素間関係のなかで多元的な方向性のもとに再編成される運命を享受せざるを得なくなったのだから。

結果として、近代の作り出した人間を理性的主体と措定した上での人間中心の知的体系に疑義が呈され、人は自然や未開、あるいは無意識・感情・感性などの非理性的なもの、克服と否定の対象とされてきたあらゆるものたちとの間に、改めて新しい関係を結ぶことを余儀なくされたのであった。換言すれば、それは、他者として差異化され、そのゆえに排除されたものたちを理解し、その価値を認めて共存することが、新しい命題として迫り出してきたということでもある。

もちろん、当事者たちが、こうした心性の変化に自覚的であったと言うのではない。もしかしたら、彼ら自身は、これらの新しい課題を、実践から見いだされた必然と見なし、閉塞的な現場の突破口と受け止めていて、知の世界に発生したこれらの動きと連動していることなど、気がついてすらいなかったかも知れない。しかし、単に教育の分野だけに限らず、知の世界一般に蠢き始めていた他分野の動向をも視野に入れるなら、教育界・保育界に起こったこの構造論議も、同じ大きな潮流の上で考えられることが至当であろう。

例えば、一九六〇年代、文化人類学が人々の視野に目に著しい鮮明さで浮上してきている。しかも、それは、従来のように、未開社会の探求によって単なる新奇なものへの好奇心だけを刺激する、エキゾチシズムの学であることを越えて、広く知の世界一般に援用可能な法則源として浮上してきたのだった。それらは、かつての哲学や神学に代わり、文科系の知の世界の王者の座につこうとしつつあるかに見えさえした。そもそも文化人類学とは、高度な文明を発達させた西欧諸

国が、未開社会という対極にある異質な他者に理解の鍬を入れようとする企てであってみれば、この動きは、けだし当然と言うべきであろう。

周知のように、文化人類学が、レヴィ＝ストロース他の活躍によって、その主流を機能主義から構造主義へと転換させつつあったことも、この動きを支え促進するものとして働いている。すなわち、レヴィ＝ストロースらの人類学は、未開社会を非文化とみなしてその啓蒙を意図する植民地主義を批判し、未開社会の神話的思考は、西欧近代の科学的思考と劣らぬ「具体の科学」であり、効率を求めて栽培化された思考とは異なる野生の思考であるとして、近代西欧社会を根底から批判する立場を取った。そして、これらの主張と提言は、近代西欧文明がようやく閉塞的状況に陥り、進歩という価値の絶対性が揺らぎ始めた当時にあって、新鮮に人々の意識を刺激し、かつ、依拠するに足る新しい基盤として、人々の無意識に浸透し始めたと言えよう。

それは、理性的人間とその営為を絶対とする人間観・世界観の解体であった。代わって出現したのが、人によって生きられる現象は、単に、理性と、その所産としての合理的意志だけを前提として考えられるべきものではなく、理性の排除したもろもろを含めて、無数の要素とそれら要素間の関係として分析・解明されねばならないとする、新しい人間観・世界観だったと言い得よう。

## 児童心理学のパラダイム・チェンジ

心理学の世界で、みずから「構造」という用語と概念を使用し、それに依拠しつつ発達現象の解明に努めたのが、今世紀最高と称された発達学者、J・ピアジェであることはよく知られている。改めて繰り返すまでもないが、ピアジェが生涯に達成した業績は、おおよそ、三つの時期に区分して把握されると言われて

いる。一九二〇年代の前期研究においては、彼の関心は、子どもの言語・判断と推理・因果関係、あるいは世界観など、大人と異なるその独自性を指摘し、意味を考えることに置かれていた。現代風に言い換えるなら、「異文化としての子ども性」の研究と言うことも可能だろうか。その後の三十～四十年代は、乳児の知能の起源および、幼児・児童の認識の基本的概念とその発達に向けられ、五十年以降の後期は、発生的認識論の構築に注がれた。中期以降、とりわけ後期の研究には「構造主義的」思索の影が濃く、六八年には『構造主義』と題される論稿すら発表されている。彼は、言明していた。「〈構造〉の概念は、今世紀の科学に対して大きな認識論的な意味を持っている。構造主義的な思潮は、言語学や人類学にとどまらず、数学、心理学、生物学等にまたがる学際的な潮流なのである（一九七〇）」。

ピアジェの前期研究に、レビ・ブリュールらの未開社会研究との類縁性を指摘することは容易であろう。例えば、レビ・ブリュールが、未開社会の「前論理的思考」を西欧文明社会の合理的思考と対比させて把握しているが、ピアジェもまた、子どもに顕著な「前論理性」を、大人と子どもを分かつ説明概念として用いているなど、その時代的共鳴を示す例と見られるのではないか。そして、知能の発達を「同化」と「調節」の両者の働きと捉え、この両者の回路を「構造」として把握するのが五十年代であった。環境に自己のパターンを圧しつける「同化」と、環境の圧力に対して自己を変形させる「調節」、この両者を弁償法的に運動させる構造こそが、人が世界に対するときの知的な在り方を決定するのであり、換言すれば、人の行動はすべて構造化されていると言うのである。

ピアジェ思想の構築に際して、レヴィ＝ストロースらの言動がどのような影を落としたのか、あるいは、

また、ソシュールら構造言語学の理論的影響がどの程度のものだったかを、明らかにすることは私の任ではなく、また、ここではその余裕もない。しかし、先に引用したピアジェの一九七〇年の論稿中の「言語学や人類学にもどまらず」という指摘にも見られるように、五十年代のフランス知性を活性化したのが、人類学や言語学に代表される「構造主義的」な分析視点であったことは事実であろうし、彼自身もまた、その動きと無縁ではなかったことも確かであろう。

ところで、わが国の場合、一九三〇年代に、初期ピアジェの紹介は、若きフランス学者波多野完治によってなされていたにもかかわらず、そのピアジェが、児童心理学・発達心理学者として教育界に絶大な影響力を発揮するようになるのは、一九六〇年代の終わりころであった。「同化」と「調節」という分節化とその弁償法的展開という発達観が、新しいキーワードとして関係者を捉え、彼の試みた知的発達に関する諸実験と結果として抽出された諸法則が、新しい教育方法の基盤とされる。「象徴機能」やら「保存概念」やらと、新規に導入されたピアジェ用語と概念が、関係者たちの間を飛び交ったのもこのころと言えよう。

教育実践と心理学との不可分の熱い関係は、二十世紀的現象である。教育が、科学を根拠とし、その方法も科学的であらねばならないとするのは、先に見たとおり、エレン・ケイの主張でもあった。今世紀初頭のアメリカ合衆国を席巻した「進歩主義教育」も、特定の誰某への信仰的帰依にまして、科学的児童研究に依拠することの必要性を強調し、科学的心理学と手を結ぶことで新しい改革を成し遂げている。わが国の場合も、遅ればせながらとその後を追った。そして、半世紀余の間に、科学的心理学は子どもの教育とその研究に関して、王者の位置についたのである。パラダイムの転換期に当たる六十～七十年代にかけても、この関係は変わっていない。しかし、王冠をゆだねられる心理学者は、時代のうねりのなかで交替させられ、戦前のドイツ系、あるいは戦後のアメリカ系の児童心理学

者たち、例えばゲゼル等に代わって、構造論者のピアジェがその椅子に座ったのであった。

マーガレット・ミードが、学問研究と文化の関係を論じた論稿のなかに次のような一文がある。すなわち、「研究者は、自分自身が属する文化の諸前提にしばられているため、特定の問題だけを問い特定の観察だけをおこなう傾向をもつ」と……。そして、ゲゼルの子ども研究がアメリカの親たちに受け入れられた経緯を以下のように論じる。「この書物は、子どもが発達する際の実際の姿を母親に知らせる手引きだったはずなのだが……それとはちがった使われ方をしてしまう。アメリカ人の母親は、自分が母としていかにうまくやっているかを確証したがり、自分の子どもを比較し他人の子どもを評価するめやすとしてこの手引き書を使うようになった」。

ゲゼルがこのように使われた動機として、彼女が指摘するのは、今世紀半ば頃のアメリカ社会を席巻した「子ども崇拝」と、それに促された「育児讃歌」であった。子どもが称賛に値する存在であり、育児が楽しんで享受さるべき悦楽であるという当時の思潮が、育児の成功度を測定する指針として、心理学者たちの発達研究を促進させたと言うのである。世界中でもっとも多く研究された集団は、アメリカの子どもたちであり、彼らを対象にして行われた子どもの行動や発達に関する研究が、他国の子ども研究や子ども理解を決定づけたとは、H・B・シュワルツマンの見解であった。

わが国も例外ではなく、アメリカで試みられた児童心理学や育児研究の成果を、直接・間接に継承しつつ、この時期の子ども研究や育児や教育の実践を遂行してきた。しかし、ここで触れたように、ゲセルらに代わって浮上してきたのがピアジェの構造主義であったとは……。「子ども」という眼前の生身の実体に接近し理解するための理論ですら、所詮、時の文化の大きなうねりから無縁ではないと言わねばならない。

（聖学院大学）